

運動部活動の指導場面における暴力の生起に関する研究

—人間の本性に着目して—

One Research About the Occurrence of the Violence in the Instruction Scene of the Sports Club Activity
—Focusing on Human Nature—

佐藤 国正

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

(2013 年 3 月 15 日 受理)

はじめに

今日までの人間の歩みは、対立と抗争の歴史であるといっても過言ではない¹。人間が直面してきた歴史を振り返ってみても、キリスト教成立、十字軍、明治維新、第二次世界大戦、東西冷戦など歴史の画期となった主要な出来事の多くは争乱や殺戮であった²。

人間と動物の行動を比較したコンラート・ローレンツ³は、これほどの高頻度で仲間同士が殺し合いをする動物は他にはなく、人間を地球上で最も凶悪な生き物として捉えている。暴力的な社会の中で人間が生活を営んできたことを指し示すローレンツの見解と、フロイト⁴が『文化への不満』のなかで暴力は人間に特有のものであると論破している点を勘案すると、暴力は人間社会で発動される固有の行為として認知できよう。

暴力とは何かという問いに対し解答を導き出すことは容易なことではない⁵。それは暴力が荒廃し、もしくは閉塞感に覆われた社会の変革手段として行使されるような、国家や民族などのマクロなレベルだけではなく、犯罪や家庭内暴力など日常生活の身近なレベルにおいても頻繁に生起するといった側面も帯

びているからである。

つまり暴力という行為は、ひとえに肉体へ行使されるものという直接的・物理的なものではなく、幅広い意味を包含した行為として理解されねばならないであろう。

人間社会において暴力が肯定されるはずもないのは、倫理的に当然のことであるが、その一方で暴力が人間の本性的なものであるという指摘が、様々な識者により提供されてきたことを見過ごしてはならないであろう⁶。その代表的な存在がフロイトとローレンツである。彼らは人間の暴力的な行為が動物の行為に類似したものであるとし、暴力を攻撃という言葉に置換し、言及している。

フロイトの論説では、人間が動物と共有してもつ本能的攻撃性を「自然的攻撃性」と呼び、人間にのみに見られる攻撃性を「人間的攻撃性」と表現している⁷。

一方、ローレンツによる人間の暴力の捉え方は、フロイトと同様に攻撃という視点を持ち合わせており、人間の本性の一部に攻撃が含まれているという⁸。

人間の攻撃は、身体的攻撃・言語的攻撃・心理的攻撃の3つに区分でき、「攻撃」は意図的危害行為で観察可能な行動反応のこと、

さらに「攻撃性」は、攻撃を生み出す心理過程を示すものと定義したのであった⁹。

ローレンツの指摘で注目すべきは、暴力を人間の本性に位置づけるのではなく、暴力を生み出す心理過程こそが人間の本性であるとしている点にある。

そこで運動部活動の指導場面における暴力の生起に関して人間の本性に着目した本研究では、ローレンツの理論を援用し、指導者のいかなる心理過程が暴力を発動させるのかを明らかにする。

運動部活動の指導場面における暴力の生起に関して、指導者の心理過程について論ずるうえで、社会心理学者である大淵憲一が提示した点に留意したい。

大淵は、我々は暴力を憎みその根絶を強く望んでいるにもかかわらず、暴力は依然として我々の身近に存在し、またその萌芽は我々自身の内部に確かに存在しており、暴力を特殊な人々の特殊な行為とみるのではなく、その暴力が生み出される人間心理を分析していく必要があると述べている¹⁰。

この大淵の言説が明らかとしていることは、人間に内在する攻撃本能を分析するとそこから暴力を析出することが可能であることを示しており、人間の本性と暴力との関係を検討するうえで、有効な指摘として捉えられるのである。

用語の定義

本研究では「攻撃」、「攻撃性」の用語について大淵憲一の定義に依拠する。

「攻撃」は「他者に危害を加えようとする意図的行為」とし、「攻撃性」は「攻撃が発動される内的な心理過程」として捉えていくものとする。

「暴力」の定義について哲学辞典では人間のあいだの社会的な関係の観点から「人間が他方の人間に身体的な脅威をあたえること、すなわち、身体的な自由を奪うとか、傷害を加えるとか、生命を危険におとしおとされるとか、

などのことをさす」¹¹とまとめている。

また、社会学辞典では暴力を「物理的強制力。ただしそれが合法性と正当性を欠いて直接人間の行為として発動される場合のみを暴力と呼び、正当性・合法性をもって発動される場合を実力と呼んで区別する」と定義している¹²。

そこで本研究では、哲学辞典・社会学辞典の定義を基礎として、暴力を「正当性や合法性を欠いて、他者の身体に対して強制や傷害を与える行為」と定義したうえで、運動部活動の指導場面における暴力について論述していく。

暴力の発動過程

—大淵憲一の攻撃行動理論に基づいて—

意図的な暴力の発動

暴力の発動過程について大淵憲一が明らかとした攻撃行動理論の1つである意図的な暴力の発動過程に着目し、考察する。

意図的な暴力とは、暴力を意図的に行使するということである。ローレンツの理論を援用し、意図的な暴力を攻撃という語に置換すると、それは「戦略的攻撃」と表現することができる。

「戦略的攻撃」とは、目標達成のための一手段として暴力を行使することである。つまり、暴力は葛藤場面における対処行動の1つなのである。この視点に立ち暴力を分析すると様々な葛藤が関係している。そこで葛藤から暴力の発動過程までの連動性について参照されたい。

例えば、自分が危害に曝されているという認知から、自分が敵意の標的になっているという恐怖心、追いつめられたという恐怖心がある場合には、「回避・防衛としての攻撃」が生じるのである¹³。

また、人の判断や態度、行動を変えようと働きかけ、嫌悪刺激を用いることや威嚇によって無理やりに従わせようとする場合では

「影響・強制としての攻撃」が生じている¹⁴。

さらに、規範的信念に基づいた罰、不正な行為を正し、正義や公正を回復したい、さらには社会的側面を含まない個人的な仕返しや同じ苦しみを味あわせたいとする場合には「制裁・報復としての攻撃」が生じるという¹⁵。

一方、ある新しい印象を積極的に作ろうとする行動とこれまで作り上げてきた印象が傷つけられそうになり、それらを守ろうとする場合には「自己呈示・同一性としての攻撃」が生じるという¹⁶。

また、日常生活において生じる攻撃行動や争いについては、社会的な報酬によって影響され、人に誉められる、尊敬される、注目される、愛される、優しくされる、服従を得るなどといった側面において、攻撃行動を用いた際に周囲の人に誉められ、注目され、好意を示され、服従された経験がある者については、似たような現象が起こった場合には、ますます攻撃行動を発動させる傾向にあることを明示している¹⁷。

上記を勘案すると、暴力は葛藤対処の手段として捉えられ、葛藤対処として暴力が連動し発動されており、さらに暴力がもたらす影響力、反響力により、より暴力を生み出し易くする発動過程が存在していることが理解できるであろう。

こうした側面を踏まえると運動部活動の指導場面における暴力は、指導者自身が意図的に暴力を発動させているとも理解できる。

一方で、もし指導者自身が自らの暴力の発動過程に対する心理過程を十分に認識していたとすれば、暴力を発動させずに済むという結論を導き出すことも可能であろう。

指導者の如何なる心理過程が、暴力を発動させているのかを探ることが可能になったであろう。

さて、こうした暴力を発動させる人間には、それぞれの性格特性が関係している。大淵は性格特性に関してバイアスと表現し、次のように示しているので参照されたい。

1つ目は、自己中心性バイアスである。こ

れは、物事を自分の欲求、権利、感情の点から合理化し、人のことを考慮に入れず、自分の損得や都合を優先する傾向にあり、権利が制限されると激しく反発する反面、人の気持ちや権利を侵すことについては鈍感であるという特徴がある¹⁸。

2つ目は、責任外在化バイアスである。これは自分の悪い行為を外的要因のせいにするというものである¹⁹。

3つ目のバイアスは、正当化バイアスである。これは人に与えた被害を軽視することや、相手がその被害にふさわしいとみなし、自分の行為を正当化するものである²⁰。

4つ目は、猜疑心バイアスである。これは敵意を持たれるであろうと予想する人とトラブルがあると、相手は攻撃してくるだろうと対決的シナリオを想定して、心構えをするものであり、他者への不信感や猜疑心が強く、自分を守らなければならないと思込むことである²¹。

以上のようなバイアスを持つ人間は、人とのトラブルに対しては攻撃的に対処するのが最善の策であり、それが正しいという判断を導き出しやすく、攻撃行動を促すという特徴があり、主観の見方に留まらず、彼らの偏った信念に合致する敵対的な社会的環境を周囲に作り上げる傾向にあるとも理解されている²²。

ここで注目したいのは暴力を発動する人々の性格特性である。自らの暴力を最善の策として捉えている点である。

運動部活動指導者が暴力を発動させる性格特性を兼ね揃えていた場合、指導者は自らの暴力について優れた改善策を用い、問題解決をしたと認識している傾向にあると考えられる。つまり、暴力が倫理的に肯定されていない社会に生きながら、自らの暴力を肯定するという問題点も生じているのであろう。

さて、これまで戦略的攻撃の心理過程について、回避・防衛、影響・強制、制裁・報復、自己呈示・同一性の4つの葛藤対処行動と性格特性に関するバイアスについて考察した。

大淵は葛藤対処行動と性格特性の関係性について次のように言及しているので参照されたい。

回避・防衛では、猜疑心バイアスとの関係性が深く、他者の敵意を知覚しやすく、他者との些細な葛藤に対しても防衛的構えを強め、このため攻撃行動を選択することが多いと考えられる²³。

影響・強制では、自己中心性バイアスが関係し自己主張性や支配性が上げられ、人に勝つことや人を従わせようとするために強引に自分の要求を通し、強制的手段をとり、支配や優越への欲求が強い人は、葛藤時において損得とは別の理由で、強制的手段を好む傾向があると考えられるのである²⁴。

制裁・報復では、人の行動を間違っていると批判的に評価し、正義感や倫理感によって攻撃が動機づけられるという。特に、偏った信念を持ち、頑固で融通性の欠ける人は他の人よりも制裁的攻撃を選択する傾向にあるといえる²⁵。

自己呈示・同一性では、自己の社会的印象にこだわる人や自分の同一性形成に熱心な人に多く、そうした自分の印象が危機に瀕した際に攻撃的になると考えられ、プライドが高い人、面子にこだわる人、自己顕示性の強い人は攻撃性が高いと考えられる²⁶。

こうした葛藤対処行動と性格特性の関係性が明らかとしていることは、暴力を発動させる人々には一定の型、分類が存在するということである。運動部活動の指導場面における暴力の生起について、指導者の心理過程、さらには指導者の性格特性を分析すると、これらが示した分類に該当する傾向にあるのではないだろうか。

戦略的攻撃から考察できることは、我々は意図的に暴力を発動させる傾向にあるということである。つまり、場合によってはそれを抑制することが可能であるとも認知できるであろう。意図的に暴力を発動することが抑制されたならば、我々は、暴力が存在しない社会に生きることも可能になる。

運動部活動の指導場面における暴力の生起について、指導者の心理過程を理解すると如何なる理由のもとに暴力を発動させているのかを理解することができる。

一方で、意図的に暴力を発動しているだけには限らないとの見解も成されている。それは感情的な暴力と呼ばれる暴力の発動が存在するからである。大淵は、これを攻撃行動理論の2つ目として述べているので参照されたい。

感情的な暴力の発動

大淵は、感情的な暴力について「衝動的攻撃」と表現し考察している。衝動的攻撃には、2つの意味が存在している。1つは、本能のような生物学的衝動が人々の中にあり、破壊的欲求から攻撃行動が生ずるという意味である。もう一方は、怒りなどの強い感情に支配された人が行動のコントロールを失ったことにより、思いがけず乱暴な行為をするという意味を示すものであり、情動が強い場合、攻撃行動が発動されると考えられている。

このように感情的な暴力は、意図的な暴力とは対照的に自らの情動が主となるものである。

大淵は、衝動的攻撃は不快感情から無条件的に生じるものであり、一般に情動性が強く、不合理にみえることがあると指摘している²⁷。衝動的攻撃は、人々が不快な経験をした際に生じる傾向にある。つまり、我々が抱く不快感情の強弱により、衝動的攻撃が発動されるのである。

大淵は戦略的攻撃の際と同様に衝動的攻撃の性格特性について「短気」、「易感性」、「反芻」の3つを提示し、それぞれ3つの特性が、衝動的攻撃の中核的要素を占め、不快情動の強度や持続性との関係性を明らかとしているので参照されたい。

「短気」と「易感性」の性格特性は、事象や事態を不快と知覚しやすい傾向にあり、一方、「反芻」はいったん生じた不快感情が長

時間持続すると、それが強まる傾向にあると述べ、その結果として衝動的攻撃の動機を強めることを明らかとした²⁸。

衝動的攻撃の性格特性に関して、短気を「些細な挑発や対立に対して、衝動的、対決的、また、荒っぽい反応をする傾向」にあり、易感性を「不快感、無力感、不完全などの感情を経験しやすく、感情的に傷つきやすい傾向」にあると捉えた。短気は身体的攻撃、言語的攻撃、間接的攻撃などを行なう傾向と相関し、易感性は自責、不安、情緒的不適応などと相関すると言及し、これらの性格特性が攻撃と密接に結びついていることを明らかにしたのであった²⁹。さらに、反芻とは、「嫌なことがあると、いつまでも怒りがおさまらなかつたり、むしろ強まったりする傾向」と定義し、不快な出来事を繰り返し心の中で想起することによって怒りが再生産されることにより攻撃反応が遅れてから生じることである³⁰。

短気、易感性に関しての注目すべき点は、不快感が強い場合、直ちに身体的攻撃、言語的攻撃、間接的攻撃として暴力が発動され易い傾向にあるということである。

反芻の場合、不快感の治まりがつかない場合、時間が経過しても突如として暴力が発動される可能性があるということである。

反芻は、執着や粘着性の思考癖であるが、これは不快感によって支配された思考であり、個人のコントロールを越えた強迫的性質をもち、不快情動を持続させる傾向にあるが、時にはその昂進を招くこともあるといえるようだ³¹。

これらからも理解できるように衝動的攻撃は、不快感から無条件的に生じるものであり、攻撃行動を発動しやすい傾向にあるということである。こうした現象は、ストレスによって引き起こされ、全く関係のない事象に対して攻撃的になる傾向があるといえる。

衝動的攻撃の特徴には、非挑発性と非機能性の2つがあり、問題解決に至らないが、自分の感情を無関係の対象に攻撃を向かわせてしまうという特徴がある。こうした事象を分

析すると暴力を発動した行為者は、強い不快感にとらわれていたことが理解でき、冷静な状態であれば無関係な事象に対して不合理な暴力を発動させなかったともいえるのである。

よって、自らの不快感の強弱について、どのように解決の糸口を見つけ出すかが、暴力の発動に大きな意味を成すのである。

運動部活動の指導場面において指導者が強い不快感を抱いた場合、感情的な暴力が発動される傾向にあるという事実が理解できよう。そうした強い不快感を抱く可能性は、誰しもあり、極自然なこととしても捉えることができよう。

しかし、不快感の発散の解決策を暴力の発動とは異なる形で見つけ出すこと、つまり不快感を如何にコントロールするかによって、暴力の発動を抑制することも可能になると考えられるのではなからうか。

ここまで攻撃行動理論の2つ目として感情的な暴力の発動過程を示す衝動的攻撃について考察し、運動部活動指導場面における暴力の生起について感情的な側面からの暴力の発動過程を明らかとした。

大淵は、意図的な暴力の発動である戦略的攻撃と感情的な暴力の発動である衝動的攻撃の他に、これらの2つの攻撃行動理論を組み合わせた二過程モデル理論について考察しているので、参照されたい。

意図的な暴力かつ感情的な暴力の発動

これまで意図的な暴力と感情的な暴力について考察してきた。ここでは、意図的な暴力と感情的な暴力を組み合わせ発動する暴力の二過程モデル理論について論考する。

二過程モデルは、戦略的攻撃と衝動的攻撃の2つの側面から成り、状況に応じて攻撃行動の過程に変化をもたらすものであることを理解されたい。二過程モデルの攻撃行動の性質の違いについて以下を参照されたい。

意図的な暴力では、葛藤の知覚や予想がそ

れを解決する戦略的行動として攻撃行動を発動させる傾向にあった。また、葛藤の知覚が怒りなどの不快感情を喚起するとそれは同時に衝動的な攻撃行動を覚醒し感情的な暴力を発動させる傾向にあったことを理解した。

二過程モデル理論では、それぞれの攻撃行動が活性化し、不快感情が強い場合には、個人の攻撃反応は衝動的な色彩を強くする傾向になり、情動覚醒が高次の認知過程を妨害するために攻撃反応の制御が不十分になり、暴力を発動させるのである³²。

一方、攻撃者が不快感情など情動覚醒をほとんどもっていない場合には、冷静に事態を分析し、環境の変化に適応的に対処しようとする傾向にあり、彼らの行動は高次の認知過程に強く制御され、決して衝動的には反応せず、叱ることがもたらす効果を考えながら、冷静にたしなめたり、激しい怒りを故意に演出したりするようになるのである³³。つまり、攻撃者が強い不快感情にとらわれていないときに示される攻撃反応はきわめて戦略的で、目標志向的であることが理解され、目標達成に対する機能性によってその行動は柔軟に変えられ、攻撃反応に拘泥することもないといえるのである。

このように二過程モデル理論は、戦略的攻撃と衝動的攻撃に分岐する前段階における暴力の発動過程の出発地点とも理解することもできる。不快感情の強弱による衝動性さらには暴力がもたらす効果などの高次の認知を行なえる戦略性を自らの心理過程にどのように位置づけるかによって、暴力の発動過程が異なるということである。

運動部活動の指導場面における暴力の生起の原点は、指導者の心理過程そのものが関連していることが認知できよう。

運動部活動の指導場面において、指導者が自らの不快感情をしっかりとコントロールし、暴力の発動過程に関する認識を深めていたとすると、これらの攻撃行動は発動されないと捉えられる。

まとめと結語

ここまで運動部活動の指導場面における暴力の生起に関して人間の本性に着目し、人間の攻撃行動理論を用い、論究してきた。

攻撃行動理論である戦略的攻撃、衝動的攻撃、二過程モデルが明らかとした暴力の発動には人間の心理過程が与えるものであることを言及した。こうした暴力を生み出す心理過程は攻撃性と呼ばれ、それは人間の本性であるということも明らかとされた。

暴力の生起について人間の本性に着目すると、暴力を生み出す要因は誰しもが身近に備え持っている。しかし、そうした暴力を生み出す要因があろうとも、それらが刺激されない限りは、必ずしも暴力へと結びつくものではないといえる。

暴力の発動過程において、我々は個人差がある。暴力に対して、しっかりとした善悪の判断、さらには攻撃的な感情を抱いている自らに対し、不快感情の解消策を見つけ出すこと、さらには不快感情のコントロールを行なえる術を養うことができたならば、我々は我々自身によって暴力を発動しにくい状況を作り出すことが可能になると考察できよう。

運動部活動の指導場面における暴力の生起について人間の本性に着目した本研究では、指導者が暴力を生起する要因は、人間の本性に根付いているものであるということが理解された。戦略的または衝動的に暴力が発動される背景を勘案すると、暴力の発動過程についての理解、さらにはそうした状況に遭遇した場合における改善策を養うことが暴力を発動させにくい心理過程を作り出すことに繋がるともいえる。

暴力は人間の心の中で生まれるのであり、人間の心の中に暴力を発動させにくい心理過程を養うことが暴力を根絶する近道となることを提言したい。

【参考文献】

- 1) 大淵憲一：『人を傷つける心—攻撃性の社会心理学—』。サイエンス社。1993.
- 2) 大淵憲一：『暴力の行動科学』。至文堂。1994.
- 3) 大淵憲一：『攻撃と暴力—なぜ人は傷つけるのか—』。丸善ライブラリー。2000.
- 4) 大淵憲一：『犯罪心理学—犯罪の原因をどこに求めるのか—』。培風館。2006.
- 5) 海老沢善一：『人はなぜ暴力をふるうのか』。梓出版社。2003.
- 6) 森宏一編：『哲学辞典』。青木書店。1995.
- 1 大淵憲一：『攻撃と暴力—なぜ人は傷つけるのか—』。丸善ライブラリー。2000。p. 2.
- 2 歴史家の推定によると、有史以来、人類の歴史の95%において争いが存在しているという。大淵憲一。同上書。p. 2.
- 3 オーストリアの動物行動学者。現代行動学の創設者。1903～1989。
- 4 オーストリアの生理学者、精神病理学者。精神分析の創設者。1856～1939。
- 5 海老沢善一：『人はなぜ暴力をふるうのか』。梓出版社。2003。pp. ii - iii.
- 6 滝充：『暴力を容認する心理—いじめの加害者・目撃者の規範意識から—』大淵憲一編『現代のエスプリ』。至文堂。1994。p.106.
- 7 フロイトの「人間的攻撃性」について、フロムは良性的攻撃である「防衛的攻撃性」と悪性的攻撃性である「破壊的攻撃性」の2つに分類している。
- 8 大淵憲一。前掲書。p.22.
- 9 大淵憲一。同上書。p.6.
- 10 大淵憲一。同上書。p.6.
- 11 森宏一編：『哲学辞典』。青木書店。1995。p.443.
- 12 山本徳郎：『体育・スポーツ評論』。不昧堂出版。第2号。1987。p.26.
- 13 大淵憲一。前掲書。2000。pp.52 - 53.
- 14 大淵憲一：『人を傷つける心—攻撃性の社会心理学—』。サイエンス社。1993。p.213.
- 15 大淵憲一。同上書。pp.223 - 224.
- 16 大淵憲一。前掲書。2000。pp.66 - 67.
- 17 大淵憲一。前掲書。1993。p.177.
- 18 大淵憲一。前掲書。2000。p.109.
- 19 大淵憲一。同上書。p.109.
- 20 大淵憲一。同上書。p.109.
- 21 大淵憲一。同上書。p.110.
- 22 大淵憲一。同上書。p.110.
- 23 大淵憲一。同上書。p.115.
- 24 大淵憲一。同上書。pp.115 - 116.
- 25 大淵憲一。同上書。p.116.
- 26 大淵憲一。同上書。p.118.
- 27 大淵憲一。同上書。p.324.
- 28 大淵憲一。同上書。p.103.
- 29 大淵憲一。同上書。p.104.
- 30 大淵憲一。同上書。p.105.
- 31 大淵憲一。同上書。pp.105 - 106.
- 32 大淵憲一。同上書。p.323.
- 33 大淵憲一。同上書。p.323.